

痙攣するデジャ・ヴュ

——ビデオで読む小津安二郎——

⑩ 『麦秋』 —— 死者の眼、そして麦穂の鎮魂 ——

中 澤 千磨夫

## 伊藤亘二の音楽

一九五一年十月三日公開。第四十四作。戦後第五作である。

暗闇から始まる。伊藤亘二の切ない音楽。わずか四、五秒で雲が流れる富士山に「松竹映画 1951」のタイトル。そして、さらに黒み。あの布地のタイトル、クレジットの間も伊藤亘二は流れる。クレジットが終わるとまた黒み。この黒みに意味を見いだしたくなる『麦秋』の開巻である。ここはぜひ覚えておいてほしい。

伊藤亘二はサウンド版『東京の宿』（一九三五年）から『麦秋』まで、一部作品を除き、小津作品の音楽に関

わった。最後となった『麦秋』のこのコーラスこそ、ある意味で小津を代表するメロディーとなった。その意味を探っていく。

## 「埴生の宿」

鎌倉の由比ヶ浜のショット。さまざまの子犬が画面右手へ歩み去るのに続き、間宮家の二階で周吉(菅井一郎)がカナリヤの餌を擦っている。籠の鳥とはいえ、死者の魂に通ずる。脚本によれば、周吉は老植物学者である。間宮家の朝食まで、ヘンリー・ローリー・ピショップ「埴生の宿」のメロディーが流れる。まずよく知られている里見義の訳詞を見よう。「埴生の宿もわが宿／玉の装いうらやまじ／長閑なりや春の空／花はあるじ鳥は友／おおわが宿よ／楽しともたのもしや」。一番にとどめるが、茅屋であっても我が家が一番といついってもある。

次にジョン・ハワード・ベインの原詞を引こう。「Mid pleasures and palaces though we may roam, / Be it ever so humble there's no place like home! / A charm from the sky seems to hallow us there, / Which, seek through the world, is ne'er met with elsewhere. / \* Home! home! sweet, sweet home! / There's no place like home!」。英詞の一番は「roam」という語が出てくる。家を出て楽し／「放浪」していても、貧しい我が家が一番というのだ。

続ひびく番。「An exile from home, splendour dazzles in vain, / Oh, give me my lowly thatched cottage again! / The birds singing gaily that came at my call, / Give me them with the peace of mind dearer than all! / \*」。気どなるのせ「An exile from home」ひびく。「exile」とは、追放者、国外放浪者。ちび『麦秋』

で放浪している者は誰か。

## 問宮家の人々

慌ただしい朝食風景。勤務医である長男・康一（笠智衆）は出勤し、妻・史子（三宅邦子）、周吉の妻・志げ（東山千榮子）、長女・紀子（原節子）、康一の長男・實（村瀬禪）、次男・勇（城澤勇夫）がちやぶ台を囲む。

紀子は北鎌倉駅から出勤。ホームで出会った矢部謙吉（二本柳寛）は、『チボー家の人々』を読んでいる。謙吉は康一の下で働く勤務医。ホームには「FOR OPUNA／YOKOHAMA／TOKYO」の表示がある。オキユパイド・ジャパン。

紀子は丸の内のオフィスで働くステノグラファーである。専務の佐竹宗太郎（佐野周二）直属。紀子が英文タイプを打っている。専務室には「USA」や「STRATOCRUISER」の写真ポスターが貼られている。そればかりでなく、ジョニーウォーカーの灰皿などしゃれた小物に囲まれており、それだけでいかほどのオフィスであるかを読者に見せつける。その専務室に紀子の女学校時代の同級生・田村アヤ（淡島千景）が訪ねてくる。アヤは料亭の娘。集金である。脚本では築地の料亭田むらの娘となっている。もちろん、実在の田むらを念頭に置いているのだろう。

## エチケツト論議

小料理屋・多き川の奥座敷で康一、史子、紀子が天麩羅を食べている。料理を運んでくる女中（PCは無視し

て当時の表現を使う)を谷よしのが演ずる。台詞は「お待ちどおさま、相済みません」のひとつのみ。谷よしのは『長屋紳士録』(一九四七年)、『風の中の牝鷄』(一九四八年)に次いでの小津作品出演。山田洋次は『男はつらいよ』シリーズで、これまた女中役などで谷よしのを重用した。小津を意識してのことであったか。

さて、卓の上にはキリンビールの大瓶が二本。運ばれた天麩羅を見て、史子が「なんだろう、これ」というと、康一が「ギャレッジ」と応え、紀子が「ああ、シャコ」と引き取る。もちろん、ガレージⅡしゃこという符丁。でも、こんなのは恥ずかしくて使えない。せいぜいガリとか、お茶と上がりを使い分けるとかくらいでしょう。お愛想というのは、勘定を指す遊里語から来ている。使わない方がいいという人が多いが、どうなんだろう。

康一は胡座、紀子は横座り。右足の裏がはっきり分かる。史子は正座だ。

康一が史子にビールを勧める。史子は断るが、おいしそうに飲む紀子がもう一度勧めると「じゃあ、もうほんの少し」とグラスを持つ。康一は「よせよせ無駄だよ。無理に飲ますこたあない」とビールを持つ手を引っ込める。紀子は義姉と顔を見合わせ、兄はエチケットに欠けるといふ。康一は「お前たちはね、何かというと、すぐエチケットエチケットって、まるで男が女に親切にする法律か何かみたいに思ってるけど、そりゃそういうもんじゃないんだ。男にしろ、女にしろ、決して他人に迷惑をかけない、いかなる意味においてもだよ、それがエチケットというものの真義なんだよ」と論ずる。

妹が「分かっちゃいるのねお兄さん、感心に」というと、妻が「分かっているのかと思ってた」と突き放したようにというか、投げやりな口調で続ける。反抗的といってもいいかもしれない。ひごろの鬱憤を晴らすような口調でもある。夫は「ばかあ」というが、勢いが無い。この史子は怖い。和服姿の史子はきちんと正座をしてお

り、斜め後ろからのこのショットでは白い足袋の裏が見える。ほぼ足の裏の形そのままである。

康一は続ける。「飯を食うのもいいが、とにかく終戦後、女がエチケットを悪用して、ますます凶々しくなってきたことだけは確かだね」。紀子が真顔で反論する。「そんなことない。これでやっと普通になってきたの。今まで男が凶々しすぎたのよ」。史子が「しっかり、しっかり」と紀子に加勢する。この時の史子の視線に注目してほしい。紀子に笑顔で声をかけ、一瞬夫に目をくれる。その冷静さよ。冷たさとまでいってみたいが、それではちょっときついか。紀子に戻した視線はまた和らぐのだ。恐い。恐るべき演技。恐るべき演出。そう、たしかに演出されているに違いない。何事も齟齬がない幸せそうな夫婦。実際には素晴らしいきいていいだろう。だが、女の心の奥底の恐ろしさが噴出しているのだ。

エチケットという言葉は、戦後の女性解放風潮の中で一般化するのだが、ここで大切なのは、女二人を相手に康一の分が悪いということよりも、その台詞の中の「ますます」という部分だ。「終戦後、女がエチケットを悪用して、ますます凶々しくなってきた」という表現で分かるように、康一の認識では女は戦前も凶々しかったということだ。見た目のごとく優男の康一は、ついこの間まで制度上の家長だったが、張り子の虎だったということ。だから、結婚問題のやりとりでも、家長に従属していたはずの紀子にいい負かされてしまう。「いつまで経ったってお嫁に行けない」と責める兄に、妹は「行けないんじゃない、行かないの」といい放つ。

それはともあれ、紀子の結婚問題が『麦秋』のストーリー上のメインストリームである。ただし、それはあくまでも表面的に見てのことである。

## 「やわらかいおいしいご飯」

このシークウエンスの中で、ビール瓶のラベルの方向が少し違ってくる。動かしていないにも関わらずだ。まず康一の右手にあるビール。麒麟のラベルマークを問題にしよう。康一がビールを取り、紀子と自分のグラスに注いで卓に置く。その前後は、ともにラベルが見えにくい角度である。そのあとそのビールに触れてはいないのだが、康一のバストショットでは、ラベルがはっきりと見える。もちろんショットの角度は違うが、康一のバストショットでは、左回りに瓶をまわしてラベルをはっきり見えるようにしたとわかっていいだろう。この時、ビール瓶は画面左手を区切っている。次に史子の右手にあるビール。飲み終えた空瓶である。史子と紀子は向かい合って坐っているのだが、背中越しのショットが入れ替わってもラベルが見えるように配されている。これらは読者にラベルを見せようという小津の意図の現れである。整合性を無視してまでこだわったということだ。タイアップに関することでもある。バストショットでの区切りは、『秋刀魚の味』（一九六二年）でより露骨に行われることになる。クラス会のダルマ（サントリー・オールド）である。

三人は多き川で食事したあと、大和から出てくる茂吉（高堂國典）を東京駅へ迎えに行くのだ。茂吉は周吉の兄。つまり、大和は間宮家の故郷ということになる。

奈良から名古屋乗り換えで東京まで来るとすると、約二時間半に約七時間を加え、ロス時間を無視すれば約九時間半、大阪まで出て東京行きに乗るとすれば、約一時間に約九時間から十時間、ロス時間抜きでも十時間以上かかった。さらに東海道本線を大船まで戻り、横須賀線に乗り換え、間宮家がある北鎌倉まで行くのに一時間ほ

どを要する。いやはや、大旅行だ。

多き川のシークウエンスの終わりは、史子の「やわらかいおいしいご飯」という言葉。間宮の家は豊かであるが、それでも日本の象徴たる米を幸せに口に運べるようになったという実感がよく出ている。この何気ない台詞を田中真澄『小津安二郎周遊』(二〇〇三・七、文藝春秋)は、これまたさりげなく注目し「いい」といつていた。

### 「鯛の浜焼き食おじゃなし」

北鎌倉間宮家の庭。物干しに洗濯物がなびく。大きな木の盥も干してある。うぐいすの声。ここにも鳥が。

茂吉・周吉兄弟が二階の部屋で、大雅堂(池大雅)の山水画の軸を眺めて語っている。

康一は日曜にも関わらず、出かける。茶を持ってきた紀子に、伯父は幾つになつたかを尋ねる。二十八という応えに、茂吉は「嫁に行こじゃなし婿取るじゃなし鯛の浜焼き食おじゃなしか」という。紀子は恥ずかしそうに笑って下りていく。

ここは露骨に性的である。年ごろになつても、「嫁に行こじゃなし婿取るじゃなし」。ここまでは簡単だ。

問題は次の「鯛の浜焼き食おじゃなし」である。これが長らく、それこそ鯛の小骨が喉に刺さつたように気になつていた。

鯛は着飾った女のこと。浜焼きといえば鯛が代表的だが、魚介類を炭火焼きしたものを広く浜焼きと呼ぶ。また、浜から女陰の蛤を連想することも自然だ。

つまり、嫁にも行かず婿も取らず、かといって女の恋人がいるのでもないということだろう。『柳多留十五篇 安永九子年刊』に「はまやきへ一チ客穴をあけはしめ」（ここでの引用は山沢英雄校訂『誹風柳多留(三)』一九五三・三、岩波文庫による）という句がある。おおらかに性を歌っている。

井原西鶴『好色一代男』巻一の「別れは当座たうざばらひ」にも「浜焼はまやき」が性のかけひきとして出てくる。京都は清水・八坂の茶屋に上がった十三歳の世之介。女から酒を勧められ、「無下むげに捨難すてがたくただけ、浜焼はまやきの中程をふつつかにはさみて、「おさへまする」といふ」（ここでの引用は『井原西鶴集一 日本古典文学全集38』一九七一・三、小学館）となる。女は浜焼きの肉をはさんで、もう一杯いかかと誘っているのである。

茂吉にからかわれた紀子は、恥ずかしそうに階段を下りていく。演出では、意味が分かっているということだろう。

直接的な出典が、端歌や都々逸にありそうだが、私には分からない。

いずれにせよ、小津が茂吉を通して紀子の原節子を愛情込めてからかっている演出といていい。のちの佐竹とアヤの寿司についての会話にも直接つながっている。

紀子が史子に五百七十円を渡す。夕べの天麩羅の分だ。仮に三人分を割り勘にしたのだとすると、喜た川は相当に値の張る店ということになる。ちなみに作品公開年である一九五一年の東京都心での天丼並は八十円（日本橋の天国）、ビール大瓶百二十三円、小学校教員の初任給は五千五十円、公務員の初任給は五千五百円であった（週刊朝日編『値段の明治大正昭和史 上』一九八七・三、朝日文庫）。

天麩羅も好みで取ったのであろうが、間宮の家の生活レベルが窺える。史子が「あんなご馳走、うちでこしら



えりゃ三分の一でできちゃう」というのも、自宅の食材にそんなにかけるのかということになるだろう。そればかりではない。紀子が自分の分を払い、さらに、そのあとのコーヒー代は自分で持ったということの意味だ。丸の内の相当に大きな商社のステノグラファーであろう紀子の羽振りのよさは気にとめておこう。

二人の孫は、耳の遠い茂吉をからかう。

シックウェンス変わって、鎌倉の大仏の前。ここでもウグイスの鳴き音。紀子が茂吉と二人の甥を連れてきている。茂吉が再び紀子の年を問う。

そこへ矢部謙吉の母・たみ（杉村春子）が謙吉のまだ幼い娘・光子（伊藤和代）を連れてやってくる。謙吉は康一と一緒に学会に出ているのだ。兄の實がまた悪さを企み、弟の勇に茂吉にキャラメルを食べさせるようそのかす。茂吉は紙包装のまま口に運ぶ。「また紙食っちゃいやがった」と實。茂吉は耳が遠いばかりでなく、軽いボケが始まっているようだ。子どもは残酷。

## 「河内山」

歌舞伎座の正面。画面上手を「第三天衣紛上野初花二幕松江邸玄関先の場」という演目が区切り、下手は第一部、第二部の開演時間が区切っている。夜の部、お馴染み「河内山」である。一九五一年段階での観劇料は棧敷席六百五十円（『値段の明治大正昭和風俗史 上』）。現在は一万六千八百円である。花道を見下ろす下手一階の棧敷席に茂吉と周吉・志げ夫婦。耳の遠い茂吉は耳に掌を当てている。

物語は佳境。二幕目第三場松江邸玄関先の場。首尾を果たした北谷道海が出雲守の屋敷を出ようとするところ

で、北村大膳に正体を見破られる。そこで道海、実は河内山宗俊が啖阿を切る。「悪に強きゃあ善にもと、世の例えにもいいう通り、親の嘆きが不憫さに、娘の命を助けんと、腹にたくみの魂胆を、練堀小路に隠れもねえ、御数奇屋坊主の宗俊が、頭の丸いせまを幸えに、衣で此岸を凌せまごうか」。

『麦秋』の撮影は一九五一年八月から九月にかけてである。歌舞伎座で「天衣紛上野初花」が上演されるのは、戦後では一九五三年二月が初めてのこと。河内山宗俊を初代中村吉右衛門、松江出雲守を十七代目中村勘三郎が演じている。もちろん『麦秋』公開後なので、使われているのは歌舞伎座上演のものではない。撮影時期に近い舞台では、一九五一年五月の明治座がある。宗俊を九代目市川海老蔵（のちに十一代目市川團十郎）、出雲守を四代目市川男女蔵（のちに三代目市川左団次）が演じている（『吉例顔見世大歌舞伎』二〇〇四・一一、歌舞伎座）。入口の看板と客席のみが歌舞伎座で撮影されたのだろう。音声は明治座のものかどうかは分からない。

小津と同じ時期に中国大陸を転戦したのが山中貞雄。その山中に『河内山宗俊』（一九三六年）があり、十五歳の原節子が可憐な姿をとどめる。小津が『麦秋』で「天衣紛上野初花」を使っているのは偶然のことではない。

## 重畳する縁談

築地田むらのアヤの部屋。ラジオの歌舞伎中継を紀子とアヤが聴いている。紀子は茂吉らが歌舞伎見物している間、アヤの家で待っているのだ。そこへ風呂上がりの安田高子（井川邦子）がやってくる。高子はやはり女学校の同級生。高子だけが既婚者。夫と喧嘩し泣きながらやってきた高子は、家からの電話で喜々として帰っていく。夫の大切にしているパイプを夫が囓り、それが高子の責任だというのが喧嘩の原因。夫婦喧嘩は夫も食わない。

田むらにはまた、佐竹が客としてやってきていた。その座敷を訪ねた紀子は、佐竹の商大での先輩である真鍋という男との縁談を薦められ、ゴルフ場でのスナップ写真を渡される。

紀子が歌舞伎座へ迎えに行くというと、佐竹が自分の車を使うようにいう。もちろん運転手が待機している車だ。紀子はじゃあ新橋まで使わせてもらうという。築地と歌舞伎座は指呼の間（実在の田むらからだと徒歩五分钟左右）だから、ここは当然省線の新橋駅までということだ。

佐竹の座敷から写真を持って走り去る紀子を追ってカメラが移動。ショット変わって客が帰った歌舞伎座の棧敷席をカメラが移動する。小津は固定という間違った観念が流布しているが、『麦秋』では移動撮影が目立つ。誰の目なのか。

その夜、問宮家の団欒。茂吉は「よかったねえ、今日の芝居しやぐは。若いもんが、なかなかようやりよる。どうしてどうして、えらいもんじゃ」という。

さらに兄が「一度、大和へも来んかな」というと、弟が「ええ、行きますよ。これで紀子でも片づいたら」と応ずる。ついで茂吉が「大和はええぞ。まほろばじゃ。いつまでも若いもんの邪魔しとることない」というと、周吉は「そうですね、このごろは康一がなにかもやってくれてるんで」と応じ、志げが「伺いますわ、是非」と続ける。

台所では紀子が史子に専務からいわれたことを話す。すると、史子は茂吉からもそんな話があるのだという。

二十八歳の紀子に縁談が重畳してきた。当時の二十八歳は完全に行き遅れの年齢だが、紀子の場合、娘一人に婿百人の世代に当たっていたことに加え、高給取りだということも婚期を遅らせているだろう。

## 善通寺

康一の病院にアヤの母・田村のぶ（高橋豊子）がやって来る。心臓を診てもらったためだ。のぶは佐竹からの縁談に触れたくてたまらない。「とてもいい方なのでございますよ、お立派な。お若いのに松川商事の常務さんでね、とても評判のいい切れる方なのでございますよ」という具合。縁談相手の真鍋も田むらの常連なのであろう。のぶはさらに続ける。「お国はたしか四国の善通寺で、なんですか、とても旧家だとかいって、まだお屋敷がそのまま残ってるなんておっしゃってましたわ」。

この時のやりとりを見ると、康一は紀子の縁談について昨夜妻から知らされてはいないようだ。不審な表情を浮かべているから。とこう解釈するのが自然のようだが、あとのシークウェンスとの整合を考えると、ここは知っているのと取った方がいいのかもしれない。

前者なら夫婦の間で、紀子の結婚という重要事項について疎通がなかったということになる。後者なら、病院での笠智衆の演技に疑問が残るといふことだ。

真鍋の実家が香川県の善通寺だというのはどうしてか。単なる偶然と方づけられないように思う。ここにまた、山中貞雄の影、より正確に言えば、山中貞雄に象徴される戦争の影が落ちているように思えてならない。

善通寺は高松から瀬戸内海を右手に坂出、丸亀、多度津と辿り、そこから四国を縦断する形で南に入ったところ。土讃線をもう一駅行けば金比羅様の琴平で、山々を越えて行けば高知県へと通じる。善通寺市の人口は三万六千人。この町には、弘法大師空海の生誕地である善通寺をはじめとして四国八十八ヶ所の霊場札所が五ヶ寺ある。

近代になり、普通寺にはもうひとつの顔が形成される。一八九六年、ここに第十一師団が設置され、軍都となったのである。今は陸上自衛隊第二混成団本部が置かれているこの町には、旧陸軍将校の社交場だった旧偕行社、赤レンガ造りの兵器庫跡、旧第十一師団司令部などが残されている。旧司令部二階には乃木記念室がある。乃木希典は初代師団長としてここで執務をとった。

佐竹の話に乗り気な康一は、これは少し先の話になるが、鎌倉の町で開業医をする同窓の西脇宏三（宮口清一）の診察室で碁を打ちながら「君あたしか、兵隊、普通寺だったね」と問う。「うん、普通寺だ」という応えに真鍋を知らないかと重ねるのだ。西脇は共通の友人である坂口が普通寺の出であることを教える。兵隊が普通寺というのは、もちろん第十一師団に所属していたということだろう。

問題はこの第十一師団。第十一師団は山中貞雄が属していた京都の第十六師団とともに南京戦、そして南京大虐殺に関わっていたということである。

普通寺市教育委員会市史編さん室編『普通寺市史 第三卷』（一九九四・一二、普通寺市）に付された陸上自衛隊普通寺駐屯地による「第十一師団歴史（抄）（自 日中戦争 至 太平洋戦争）」から引く。昭和十二年（一九三七年）の項。十二月三日。「天谷支隊ハ軍直部隊トシテ鎮江攻撃ノ為十二月五日常州出発丹陽ヲ経テ十二月八日鎮江ヲ占領十三日未明揚子江ヲ渡河前面ノ敵ヲ驅逐シテ十二月十四日夕揚州ヲ占領爾後同地附近ノ警備ニ任ス／昭和十三年／一月八日 楊州附近ノ警備ヲ第三師団ト交代シ一月十六日南京ニ到着第十六師団ニ代リ同地ノ警備ニ任ス（略）」／二月二十八日 第十一師団ハ内地帰還ヲ命セラル（略）／三月六日（略）天谷支隊ハ三月十九日南京下関馬磔ニ於テ乗船三十日坂出港ニ上陸ヲ終リ郷土官民歡呼ノ裡ニ各々原隊ニ還リ四月十二日師団ノ復員ヲ

完結ス」(引用に際し、旧字は新字に直した)。南京攻略の時、第十一師団の主力は台湾に居たのだが、天谷支隊が参加している。天谷直次郎少将率いる歩兵第十旅団である。

「第十一師団歴史(抄)」の昭和十四年の頃に見逃せない記事があるので引いておく。

八月二十七日 化学戦普及教育ノ為左記真毒ヲ以テ各隊基幹人員ニ対シ教育ヲ実施ス

左記

きい一号 乙 あか禪マ

きい二号 きい禪マ

あか筒 消函

「あか禪」「きい禪」は「あか弾」「きい弾」の誤記もしくは誤植だろう。あか弾は嘔吐性ガス弾、きい弾はイペリット、ルイサイト弾を指す。

吉見義明『毒ガス戦と日本軍』(二〇〇四・七、岩波書店)は、中国大陸で日本軍の毒ガス使用が恒常化するさまを描く。吉見によれば、日本政府は一九九五年から「嘔吐性(クシャミ性)ガスの使用については認めるが、糜爛性ガスや青酸ガスなど、いわゆる「致死性ガス」の使用については認めなくなった」という。

一九三九年八月二十七日の記事のころ、第十一師団は満州にいた。「真毒」による「化学戦普及教育」とは人体実験ではなかったか。それが、「第十一師団歴史」という旧陸軍・自衛隊による公文書に記されているのである。

## 「昔の味」

間宮家。康一は史子にのぶの話を伝える。のぶの診察のあと、夫婦は初めて話すのだが、紀子の縁談は既知のこととして扱われている。「なかなかよさそう」という。史子が写真を見たという。康一の「どんな男だい」という問いに、史子は「ゴルフの写真で、顔はよく見えないんだけど」と応える。これに康一が「そりゃよさそうじゃないか」と反応する。まだ現物を見ていないのである。昨夜の齟齬の問題をぶり返せば、縁談は報告しても写真についてはいわなかったことになる。紀子が史子に写真を見せたのが昨夜ではなく今日だとも考えられる。チャア子の披露宴へ行く前に見せたのだろうか。

康一にとって、何が「よさそう」なのか。松川商事常務という地位とゴルフにほかならない。今と違って、ゴルフは大衆スポーツではなかった。選ばれた者のスポーツだったのだ。

康一は風呂から上がった周吉に紀子の縁談のことを告げ、「調べてみようと思う」という。興信所に調べさせようということ。

シックウエンス変わって喫茶店。同級生・チャア子の結婚披露宴帰りの紀子、アヤ、高子、高梨マリ（志賀真津子）が談笑している。新婚旅行に高子は修善寺、マリは熱海に行ったことを話し、ここでも既婚組と未婚組の対立が起こる。新婚旅行地はまだまだ近場だったのだ。

その夜、紀子が土産に持って帰ったショートケーキを食べながら、史子は「おいしいわ。とてもおいしいわ。昔の味」としみじみいう。紀子は「そう。じゃ今度たくさん買ってこよう」と応ずる。

戦中・戦後、日本人は酒や甘いものといった嗜好品に飢えていた。一九五一年段階では、まだ戦前の生活のピークだった一九三七年ころまでは回復していない。それにはあと数年、高度経済成長の入り口まで待たなければならなかった。

史子のはしなくも発した「昔の味」というひとは、当時の日本人の生活感覚をよく表していた。とはいえ、先にも触れたが間宮家の生活程度は高く、平均的な家庭を反映していたとはいいたいというまでもない。

## 土浦・宇都宮

昼、謙吉の母・たみが間宮家を訪れる。志げに「こんなものお口に合いますかどうですか、今朝土浦から送ってまいったんでございますよ」と差し出す。土浦の名産といえば、ワカサギやフナなどの佃煮、甘露煮、イカダ焼きなど考えられる。

それはともかく、なぜ土浦なのか。これまた、先ほどの善通寺同様、想像を巡らすしかない。のちほど、謙吉の秋田赴任の話が出る時、たみは「うちが鉄道にいたもんだから、宇都宮までは行ったことがある」という。この「うち」は死んだ夫だろうか。それともたみの実家を指すのだろうか。前者だとは思うが、どちらとも確とは判断しがたい。宇都宮といえば、すぐに志賀直哉「網走まで」（一九一〇年）が連想される。小津が志賀に傾倒していたこと、『風の中の牝鶏』が小津の『暗夜行路』（一九二一〜三七年）であることなどはすでに論じた。だが、それ以上に宇都宮が不気味なのは、この町に置かれていた第百十四師団がこれまた南京事件に加担しているからだ。



さて、土浦。土浦と矢部の家との関係で考えられるのは三つばかりの可能性か。まず宇都宮と同様、夫の実家、たみの実家である可能性。さらには謙吉の亡妻の実家である可能性。この三つのケースが有力だが、そのほかに親戚や知り合いという場合もあり、決められない。とはいえ、気がかりなのは土浦が特別な場所だからだ。

現在陸上自衛隊武器学校になっている場所に土浦海軍航空隊があった。海軍航空少年兵を養成する予科練習部（予科練）は一九三〇年横須賀海軍航空隊に設置されたが、一九三九年、霞ヶ浦航空隊に移設され、翌一九四〇年、土浦海軍航空隊となった。その後、岩国、三重、鹿児島、松山など続々と開設されるが、土浦の予科練がもっともよく知られている。「若い血潮の予科練の／七つ釘は桜に錨／今日も飛ぶ飛ぶ／霞ヶ浦にゃ／でっかい希望の雲が湧く」（西条八十詞／古関裕而曲）である。歌は霧島昇、波平暁男。「十九年一月コロムビア。このレコードは二十年八月末までに二十三万枚売れたという」（堀内敬三『定本 日本の軍歌』一九六九・九、実業之日本社）。戦争末期でのこの数字は驚異的である。

土浦（行政区画上、正確には阿見町）の陸上自衛隊武器学校内には、一九六八年に完成した雄翔館という予科練記念館がある。予科練出身戦没者一万八千五百六十四柱の霊爾簿が奉安され、遺品・遺影・遺書などが保存・展示されている。

小島啓三編『海軍飛行豫科練習生 遺書・遺詠・遺稿集（一）』（二〇〇四・一、財団法人海原会）から一編のみ引く。福島県出身の海軍上等飛行兵曹・島田三喜男の遺文。「希くは さいはての地まで／昭和の御代に 童顔の予科練という／『さきがけ』ありと／後生に 伝えられんことを」。島田は、一九四四年六月十六日、硫黄島南方海域で哨戒任務中に敵機動部隊を発見。これと交戦し、被弾自爆した。享年二十歳。

また、雄翔館に隣接して日本庭園・雄翔園が整備されている。日本列島とまわりの四海が形づくられており、富士山がひときわ高く築山されている。これまた富士山信仰だ。

ついでながら、佐々木康『少年航空兵』（一九三六年）は、茅ヶ崎出身の少年が予科練に入り、故郷に錦を飾るといふ映画。茅ヶ崎を部隊にした数少ない映画のひとつとして記憶したい（拙稿「少年少女たちの戦場——国策映画の場合——」『ブレイメン館』2、二〇〇四・六）。

かく土浦・宇都宮という地名にこだわってきたのは、いずれも小津が戦った戦争に密接に結びついた地名だからである。これはもう偶然などというものではなく、明らかに意図して埋め込まれた地名と違って間違いない。

## 省二という不在

間宮家の不在家族である省二の問題については、これまで何度も書いてきた。『麦秋』の文脈に限ってなぞってみよう。

土浦名産を志げに渡したたみは、興信所が紀子のことを聞きにきたと告げる。

「いやな奴でねえ、なんでもよく調べてるんでございますよ。お宅の省二さんとうちの謙吉とが同じ高等学校だなんてことまで」と、話題が省二に及ぶ。脚本によれば、謙吉は三十四歳。省二の年齢にも当たる。康一が三十八歳、紀子は二十八歳である。ラストに近く北鎌倉の家に来て「足かけ十八年」という周吉の述懐があるから、省二が旧制高校生の時代、間宮家がどこに住んでいたかは特定できない。

周吉がやってきて、一昨年亡くなった謙吉の妻に話題が及び、さらに省二のことに。会話を引く。

たみ「お宅の省二さんも」

周吉「いやあ、あれはもう帰ってきませんわ」

たみ「でも、このごろになってまたぼつぼつ南方から」

周吉「いやあ、もう諦めてますよ。これ（志げ）はまだ省二がどっかで生きてると思ってるようですがね」

たみ「ご無理ございませんわ、ほんとにねえ、奥さま」

周吉「根気よく毎日、まだラジオの「たずね人」の時間なんか聞いてますよ」

志げ「人間って不思議なもんですね。今あったことをすぐ忘れるくせに、省二が元気だった時分のことは

はっきり覚えてるんで」

周吉「いやあ、もう帰ってこないよ」

志げが「たずね人」の時間を聞いていること、周吉が「もう帰って」こないと繰り返していることを素直に読めば、省二が戦死してしまっているとはいえない。

悲しそうな顔の志げが庭を見上げる。三本の鯉のぼりが薫風になびいている。

## 振られた小姑

西脇医院。病院前に大勢子どもがいる。碁を打つ康一と西脇。ここで出た話題が、既に触れた善通寺である。

西脇がばかに子どもが増えたことを話題にする。団塊の世代の子どもたちだ。

間宮家には近所の子どもたちが大勢遊びに来ている。その一人に『長屋紳士録』（一九四七年）の青木放屁もいる。座敷にレールを引いて汽車を走らせている。史子と紀子がサンドイッチを作って子どもたちにふるまう。こんな優雅な家もありましたね。もちろんごくごく稀にだ。

實が母や叔母にレールを買ってくれとせがむ。「お父さんに伺ってみる」という母の言葉に、實は期待を膨らませる。

東京からアヤが訪ねてくる。皆で集まろうとチャア子の披露宴のあと、約束していたのだ。来るなり、アヤはマリが来られないことを告げる。

二階の紀子の部屋にはジュースやコカ・コーラの瓶が並べられている。子どもたちへのサンドイッチはおすそ分けだったのだ。

マリが来られないのは旦那が急に出張だからだと、アヤはいう。「女中だっているん」だから来ればいいのにとも。「女中」という言葉が生きていた。この言葉が無くなり、「お手伝いさん」といい換えられて内実も変化するのは高度成長期のことだ（拙稿「境外乱踏①〈女中〉の行方——「細雪」と「台所太平記」——」『Crab』2、一九九四・六）。

大磯の高子から紀子に電話があり、父の様態が悪く来られないという。アヤは「嘘だあ、おとついの新聞に出てたわよ。おたかのお父さんの車中談」という。大磯在住で汽車の中で談話をする。これはもう、時の総理大臣・吉田茂を思わせる。田むらの娘といい、北鎌倉や大磯の娘といい、『麦秋』の世界は真の「中流」の娘たちの世界を背景としている。いうまでもなく、高度成長期以降の一億総中流とは大衆のことである。そういうば、電話

する紀子の向こうに、間宮家の家紋ならん、九曜紋が見える。

既婚の同級生たちに振られた形の未婚者ふたり。アヤは「ちよいとした小姑だもんねえ」という。紀子はジュースの瓶を抜くのに、王冠を軽く二回叩く。今じゃあ見かけることはなくなったが、例えば私の子ども時代には当たり前前の光景だった。ビールの場合には泡立ちがよくなるのもいっていたかな。もっとも今は王冠のある飲み物自体少なくなったが。こんな日常の所作も変わっていくのだ。

## 九百円のケーキ

紀子とアヤが並んでジュースを飲むのに変わって、東京国立博物館前。周吉と志げが、並んで昼食のサンドイッチを食べている。

周吉はいう。「しかし、なんだねえ。うちも今が一番いい時かも知れないねえ。これで紀子でも嫁にいけば、また寂しくなるし」と。とどまることなく移りゆく家族という認識。

夫婦は佐竹からの縁談が気になる。

さらに周吉は「早いもんだ。康一が嫁をもらう。孫が生まれる。紀子が嫁に行く。今が一番楽しい時かもしれないよ」と続ける。次々と移ろい受け継がれていく。それはなにも生きているものだけに限らず、死者たちとて同じだ。いうまでもなく不在の省二も当然そのひとつの環である。輪廻とっていい。

その夜、研究室に泊まることになった康一は、電話で佐竹の話がなかなかいいらしいと史子に告げる。

間宮家の台所では、紀子がホールのショートケーキを切っている。

九百円という値段を聞いて、史子はびっくりする。食べるのが嫌になったと。「良い毛糸が半ポンド買える」と。九百円はたしかに高い。歌舞伎座の棧敷以上なのだ。

そこへ謙吉がやって来る。ケーキの相伴に預かる謙吉にも縁談があることが分かる。紀子も史子も貰ってしまいなさいという。

## 次男の問題

翌日、康一が角柱型の風呂敷包みを持って帰宅する。実はレールだと思い、受け取って子ども部屋に駆け込む。勇と一緒に開けてみると、なんと食パン。三斤棒だ。實は痲癩を起こし、パンを放り投げる。

座敷では、康一が西脇に教えてもらった善通寺出身の坂口から聞いた話を報告している。「善通寺でも指折りの名家で、その次男」だと。さらに、康一は続ける。「紳士録にも出てる」と。康一はおおいに乗り気だ。今なら紳士録に載っているのは迷惑だと、削除してもらおうという動きもある。世知辛くなったものだ。昔の紳士録は有り難かったんだね。

志げが年を聞く。康一は「明治四十三年だから、幾つになるかな、四十二ですか」と応える。満だと四十歳。これに志げと史子が難色を示す。志げは「でも、一回りの余も違うとねえ」、「なんだか可哀想な気がして」とも。三人の間に気まずい空気が流れる。

康一は真鍋が次男であることも気に入っているだろうか。たしかに、家を継がず、親の面倒を見る必要がない次男はいいという風潮はあった。だが、ただそれだけではなく、小津自身も次男であり重ねるところがあったの

だろう。『東京物語』（一九五三年）の昌二も不在の次男である。

一方の實と勇。實は父の前にパンを放り出し、「嘘つき」と抗議する。さらに左足でパンを軽く、ついで右足でやや強く蹴飛ばす。康一は「何をするか。食べるものを足で蹴る奴があるか」と殴りかかるが、まったく力無い。勇が横から出てきて、蹴飛ばすとパンがふたつに割れる。

このショットは印象的である。先の紀子とのエチケツト論議にも通ずるが、戦後の風潮の中、康一はすっかり家父長の顔色を無くしているのだ。

## リケツチア

勇が割ったパンにカメラが寄っていく。

兄弟は七里ヶ浜を歩いていく。上手向こうに江ノ島が見える。實が「バカヤロー。バカヤロー」と海に叫ぶ。勇は立ち小便をしている。間宮家のある北鎌倉からだから、ずいぶん歩いてきたものだ。

夜になっても兄弟は帰らず、間宮家のお膳には子どもたちの食事だけが残っている。

周吉、紀子を探しに出る。紀子から聞いた謙吉も手伝う。一方、康一は心配しながらも西脇の診察所で碁を打っている。こんなところにも行動できない気弱い康一の姿がある。

ここで西脇から康一を通して、謙吉の秋田赴任の話が出る。

翌日、勤めから帰った謙吉が母に秋田に行こうと思うといい出す。県立病院の内科部長にという話だ。母は気が乗らない。

謙吉はいう。「秋田へ行きゃあ、恙虫ツツガシもいるし、リッケッチャの研究も出来るんだ」と。  
気になる。リッケッチャは石井四郎の関東軍七三二部隊の研究テーマのひとつだった。謙吉の研究テーマがリッケッチャであったとして、なんら構わない。だが、それが中国大陸の戦争の暗黒部である七三一部隊を連想させるものであるのは、やはりただごとではない。もしかして謙吉は陸軍軍医学校で学んだのではないかというようなことまで想像してみたくなる。

### セクハラ？

佐竹の専務室にアヤがやってくる。紀子は外出している。アヤは夕べ真鍋が来たが、紀子のことは何もいっていなかったと伝える。話は紀子の色気に及ぶ。引いてみる。

佐竹「しかし、どうなんだい。あいつ、いったい」

アヤ「何が」

佐竹「あるのかい、色気」

アヤ「専務さん、ごらんになって、どう」

佐竹「さあ、あるような、ないような。おかしな奴だよ。昔からあんな奴かい」

アヤ「そう」

佐竹「誰かに惚れたことないのかい」



アヤ「さあ、ないでしょあの人。学校時分、ヘップバーン好きで、プロマイドこんなに集めてたけど」

佐竹「なんだい、ヘップバーンって」

アヤ「アメリカの女優よ」

佐竹「じゃ、女じゃないか」

アヤ「そうよ」

佐竹「変態か」

アヤ「まさかあ」

佐竹「いやあ、そんなとこだよ。おかしな奴だよ。少し教えてやれよ」

アヤ「なーに」

佐竹「いろんなこと」

アヤ「いろんなことって」

佐竹「おとぼけでないよ」

アヤ「何さ。バカにしてるわ」

(略)

佐竹「どうだい、寿司でも食いに行かないか」

アヤ「そうね」

佐竹「寿司、何が好きだい」

アヤ「まあ、トロね」

佐竹「トロか。ハマどうだい。ハマグリ」

アヤ「好きよ」

佐竹「海苔巻きどうだい」

アヤ「嫌い」

佐竹「君も変態だよ。ははははははははは」

ヘップバーンは、もちろんキャサリン・ヘップバーン。まあ、アヤは料亭の娘だから男女の事情にも通じているのだろうが、それにしても露骨な会話だ。特に寿司のやりとり。ハマグリが女陰で海苔巻きが男根であるこというまでもない。アヤはいち早く隠語の意味を察して「嫌い」といったのだ。寿司の海苔巻きが好きか嫌いかわはなく、そんなことをいう佐竹が「嫌い」なのだ。

佐竹とアヤの間には権力上の支配・被支配関係はないから、セクハラにはあたらない。うむ。佐竹が田むらの上得意だとすると、そうともいいきれないか。いや、それはもう野暮というもの。いいですね。こんなおおっぴらな猥談って。

これまで何度も書いてきたが、小津映画には必ずといっていいくらい色っぽい話題が出てくる。それが正面切っではないので、気づかれないこともあるのかもしれないが、その意味でも小津映画は大人の映画だ。小津の猥談というテーマで論文一本は軽く書ける。

## 穂の麦の結び

ニコライ堂を望む喫茶店で紀子と謙吉が向かい合ってお茶を飲んでいる。謙吉の栄転祝いに、康一と三人で食事をするための待ち合わせである。

謙吉は学生時代によく省二と来たという。「よく喧嘩もしたけど、あたし省兄さんとても好きだった」という紀子に、謙吉は「あ、省二君の手紙があるんです。徐州戦の時向こうから来た軍事郵便で、中に麦の穂が入ってます。その時分、僕あちようど『麦と兵隊』読んで」と打ち明ける。

徐州会戦は一九三八年四月七日から五月二十日にかけて戦われた。南京攻略のあと、日本軍は戦線をますます拡大し、大陸内部へと侵入していったのである。謙吉と省二は同級生だから、徐州戦に参戦した省二は二十一歳かそこらである。

火野葦平「麦と兵隊」は『改造』一九三八年八月号に掲載された。同年九月に改造社から刊行された単行本は百二十万部のベストセラーになった。

徐州戦と「麦と兵隊」には一月以上の時差がある。「麦と兵隊」が徐州戦の記録である以上当然だ。だとすれば、徐州戦の時、省二の麦の穂入りの手紙が来て、ちようど『麦と兵隊』を読んでいたという謙吉の回想には、軍事郵便の遅れを考へても矛盾があるか。問うほどのことでもあるまいが。

「麦と兵隊」は「見渡すかぎりの茫漠たる麦畑」(ここの引用は火野葦平『麦と兵隊・土と兵隊』一九六〇・八、角川文庫)を描く。二〇〇五年三月、私は開封から徐州、徐州から南京そして上海へと中国鉄路を乗り継ぎ

車窓風景を堪能した。たしかにどこまでも続く農村風景。青々とした「麦子」である。(拙稿「小津安二郎・山中貞雄の南京へ行く(メモランダム)」『ブレイメン館』3、二〇〇五・六)

小津安二郎も山中貞雄も南京戦のあと、徐州へ転戦している。山中は徐州戦で国民党軍が決壊させた黄河の水の中を行軍し、急性腸炎に罹患。一九三八年九月十七日、開封の野戦病院で没した。享年二十九歳。

省二が徐州戦に参加していること。大和の茂吉が観た歌舞伎が「天衣紛上野初花」であること。これらの仕掛けは偶然組み込まれたものではなからう。むろん、山中貞雄を意識してのことである。

さて、その省二の手紙を紀子が所望する。紀子と謙吉は省二を介して長い間の知り合いであるが、この麦の穂入りの手紙こそ、直接の結びの神となるのである。

## 砲兵学校

小津と山中が中国大陸でたった一度会っていること。それが南京東方の湯山鎮にある砲兵学校のこと、現在は中国人民解放軍砲兵学院南京分院となっていることは、既に書いた(拙稿「敗けてよかった」再考——小津安二郎の戦争・序説——『社会文学』22、二〇〇五・六、「小津安二郎・山中貞雄の南京へ行く(メモランダム)」(前出)など)。

小津は「句容」、山中は「湯水鎮」と記しているが、二〇〇五年三月、南京・句容間を調査した私は湯山鎮のことだろうと推定したのだ。一九三八年一月十二日の早朝、二人はわずか四十分ほどの面会で旧交を暖めたのであった。

下里正樹『隠された聯隊史 「20 i」下級兵士の見た南京事件の実相』（一九八七・一一、平和のための京都の戦争展実行委員会（発売は青木書店））に紹介されている上羽武一郎の陣中資料から、この砲兵学校についての記述を引く。上羽は第十六師団衛生隊車両中隊衛生兵だった。

砲兵学校 9 大理石の校門にはほろり。広大さにあきれ。

山をぬって四里前進担送。たい松の道しるべ、敗残兵を検べるに、村中引出し、身体検べ、皆頭をつるんつるん5人中に一人見付る（証明書所持す）。一同の顔（ヒコーベ）悲そうなり。

百人狩出して担送さす。彼の心や如何に。クーリークを背にして敗残兵一勢射撃。血の海。之で土民のきもを取る事にする。（『隠された聯隊史』には下里による翻刻があるが、ここでは同書扉にある写真版から独自に翻刻した。ただし、旧字は新字に直し、適宜句読点を補った）

下里はいう。「南京事件を論じる場合、それが日本軍の南京占領前後の、短い期間に限定されてはならない。／＼もしそのような限定をおこなえば、我々は近視眼的なあやまりを犯す。中国軍は首都・南京防衛のため、無錫一帯をはじめとする防御陣地を構築していた。その一つ一つの攻略が、日本軍の南京への道程であった」と。

全くその通りだと思う。南京事件を南京城内の虐殺に限定して、被害者の数を喋々することなど、あまり意味がないのである。

『隠された聯隊史』に一部紹介されている東史郎の陣中手記が、『東史郎日記』（二〇〇一・六、熊本出版文化

会館)としてまとめられていることを記しておく。東が記録した「中文」における日本軍の蛮行を読み継ぐには、何度も休息を取らねばならなかった。

## アンパンと家族の屈託

ある夜、紀子が餞別を持って謙吉の家を訪ねる。脚本に気になる記述がある。「光子が眠っている。／将校用の行李などが出してあって、たみが謙吉の靴下を繕っている」。(ここでの引用は井上和男編『小津安二郎全集「下」』二〇〇三・四、新書館) たみの前に小ぶりの行李とボストンバッグ。旅の支度である。この行李が将校用だとして、誰のものか。たみの亡夫のものか。あるいは謙吉のものである可能性もある。

謙吉は送別会で留守である。ここでたみが、「あたしゃもうこのまま謙吉に嫁でも貰って、一生ここにいたいと思ってたんですけど。実はね。紀子さん怒らないでね。謙吉にも内緒にしといてよ」と切り出す。「虫のいいお話なんだけど、あんたのような方に謙吉のお嫁さんになっていただけたらどんなにいいだろうなんて。そんなこと思ったりしてね」と続けるたみに、紀子は「そう」という。さらにたみが「ごめんなさい。これはあたしがお腹中だけで思った夢みたいな話。怒っちゃ駄目よ」という。紀子は「ねえ小母さん、あたしみたいな売れ残りでいい」と聞く。「へえ」と疑うたみに、紀子は「あたしでよかったですら」という。

「ありがとう」と何度も繰り返すたみは、「紀子さん、パン食べない。アンパン」という。アンパンは馳走だった。重大事のあとのアンパンはたみを演じる杉村春子のコメディエンスぶりを十分に表す。それとともに、性食の通底も示しており、ラストに近い紀子の茶漬けに繋がる。

紀子の決断は家族の不興を買うことになる。

しかし、紀子の決意は固い。翌日、先に秋田へ行く謙吉を紀子とともに上野で見送ったたみが、デパートに寄ったあと紀子のオフィスを訪れる。ここでもちよこまか動き回るため。

同じころ、間宮家では志げと史子が布団に綿を入れている。そういえば、昔はこんなことも家でしていたのだ。私の記憶にもある風景だ。志げの愚痴を聞こう。「本人はよくたって、あたしたちが付いてて、なんだか可哀想な気がしちゃって。あたしもねえ、あの子が女学校出た時分から、いいお嬢さんだ、いいお嬢さんだっていわれるたびに、どんなところへお嫁に行くんだろうと思ってたんだけど。田園調布の篠田さんねえ、あすこへ伺うたびに、紀子も、あんな芝生のあるハイカラな家の奥さんになるんじゃないかなんて思ってたんだけど。これだったら、専務さんからのお話の方が、まだよかったんじゃないかしらねえ」といった具合。年の差から専務の話に「なんだか可哀想」といっていたのは志げだったのに。

そして、志げは「見当も付きませんよ。このごろの若い人は」とまでいうのである。

周吉はカナリヤの餌を買いに行く。庚申塔を通り、踏切横の縁石に腰を下ろす。画面下手、踏切横に大きな看板。「使用中止 CAUTION AUTOMATIC ALARM IS OUT OF ORDER」。オキユパイド・ジャパン。空を見上げる周吉。通り過ぎる列車。事態は動いていく。

## コカ・コーラ

田むらのアヤの部屋。紀子とアヤの会話が楽しい。アヤがいう。「あんたって人、庭に白い草花かなんか植え

ちゃって、シヨパンかなんかかけちゃって、タイルの台所に電気冷蔵庫かなんか置いてちゃって、こう開けるとコカ・コーラか何か並んじゃって、そんな奥さんなるんじゃないかと思ってたのよ。あたしが遊びに行くでしょう。そしたら、ほら、だんだらの日よけのあるポーチかなんかでき、あんだ、真っ白なセーターかなんか着ちゃってさ、スコッチ・テリヤかなんかと遊んで、垣根越しに、Hello! How are you? なあんていっちゃって」といった具合。この当時では一般には存在しないハイカラーな生活だ。

コカ・コーラが日本人の生活に浸透するのは高度成長期に入ってから。「日本のコカ・コーラ事業の父」と呼ばれる高梨仁三郎が、東京コカ・コーラボトリングの前身、東京飲料を設立したが、一九五六年十一月十二日だった。(宮本惇夫『コカ・コーラへの道』一九九四・一一、かのう書房) 高梨仁三郎は千葉県野田の人。鎌倉文化人でもあった。一族はキックマンの設立に関わるから、コカ・コーラと小津には地縁がある。

その東京コカ・コーラが百九十ミリリットルのレギュラーサイズ瓶を発売するのが一九五七年五月八日である。日本コカ・コーラ株式会社の前身、日本飲料工業株式会社の設立は一九五七年六月二十五日。北海道コカ・コーラボトリング株式会社の設立が一九六三年一月二四日、沖縄コカ・コーラボトリング株式会社は一九六八年二月二十二日。他の地域では一九六二年から六三年にかけてボトリング会社が設立された。こうして高度成長期を通して日本中にコカ・コーラ文化が浸透した。

戦前にも、コカ・コーラは売られていた。それはアメリカ文化を匂わせる高級輸入品だったのだ。古く高村光太郎は『道程』(一九一四・一〇、抒情詩社) 所収の「狂者の詩」に「吹いて来い、吹いて来い／秩父おろしの寒い風／山からこんころりと吹いて来い／世は末法だ、吹いて来い／己の背中へ吹いて来い／頭の中から猫が



啼く／何処かで誰かがロタンを餌にする／コココオラ、THANK YOU VERY MUCH／銀座二丁目三丁目、それから尾張町／電車、電燈、電線電話／ちりりん、ちりりん／柳の枝さへ夜霧の中で／白ぼつけない腕を組んで／しんみに己に意見をする気だ／コココオラもう一杯／（略）／己はしまひには気がちがひ相だ／ああ、髪の毛の香ひがする／それはあの人のだ、羚羊の角／コココオラもう一杯／きちがひ、きちがひに何が出来る／己はともかくも歩くのだ／銀座二丁目三丁目、それから尾張町／歌舞伎の屋根へ月が出る／己の背中へ吹いて来い／秩父おろしの寒い風／山からこんころりと吹いて来い」（ここでの引用は新選名著復刻全集近代文学館『道程』一九七四・一二、日本近代文学館、ただし旧字は新字に直し、変体仮名も通例のものに直した）と詠っている。強烈な自意識。エリート意識といってもいい。ココ・コーラがそんな意識を抱えた青年のファッションだったことがよく分かる。

また芥川龍之介も一九二五年五月一日、修善寺から佐佐木茂素に宛てた書簡に「コココラ」を出している。

〔新修善寺 いでゆもすみえ太夫作〕という体裁で「思へば九月一日の、地震に崩れかかりたる、門や土塀を修善寺や、五分すすみし時計ゆゑ、六時五分は午後六時、君をはじめて御幸橋、酒のまめ身のウウロン茶、カフェ、コココラ、チヨコレト、ヴィタミンCのありと言ふ緑茶はのめど忘れられぬ君を芸者と菊屋にも、電燈ともる夕まぐれ、2×2=4とは思へども2×2=5六、七八度、橋のたもとへ出て見たる、（略）」（ここでの引用は『芥川龍之介全集 第二十卷』一九九七・八、岩波書店）と女心を綴ってみせる。ここでも瀟洒なノンアルコールとしてココ・コーラを使っているのだ。

ココ・コーラは『晩春』（一九四九年）にも使われている。曾宮紀子（原節子）と服部昌一（宇佐美淳）が茅

ヶ崎海岸をサイクリングするシークウエンスにコカ・コーラの看板が出てくる。

## 古風なアプレ・ゲール

アヤは紀子がコカ・コーラに象徴されるようなアメリカ式家庭の主婦を予想していたのだが、それが秋田に嫁ぐという。アヤは秋田弁で紀子をからかい、紀子も当意即妙に応じる。アヤが「よく知ってるわねえ、あんた」と驚くのに、紀子が「だって学校ん時、佐々木さんそうだったじゃないの」と応える。ここで佐々木というのは佐々木康監督の名から取っているだろう。佐々木康は戦前、小津組の助監督を務めた。一九三〇年代から六〇年代にかけて、松竹と東映であまたの娯楽傑作を残した。美空ひばり映画の担い手でもある。秋田出身の佐々木は「ジーさん」の愛称で親しまれた。

アヤは謙吉のことを「いつかお宅の省二さん、まだスマトラへ行く前、みんなで城ヶ島へ行ったことあったでしょう。あの時の人」と聞く。省二は中国大陸から復員後、さらに南方へ取られたことが分かる。敗戦後六年、省二はまだ帰ってこないのである。

紀子は謙吉について「好きとか嫌いとかじゃないのよ。昔っから一番よく知ってるし、この人なら信頼できると思ったのよ」という。

アヤに「好きなのよ。惚れちゃったのよお、あんた。本惚れよお」とからかわれ、二人は座卓を間に追いかけてを演ずる。このあたり、いかにも旧制女学校の仲良しのたわむれの雰囲気が出ていてほほえましい。

専務の方の話は断ったが、専務は「大変古風なアプレ・ゲールだって、笑ってたわ」と。戦後の新時代、紀子

も兄とのエチケツト論議などで十分新世代ぶりを見せたが、それでも謙吉の方を選ぶあたり、「大変古風」だといふのだ。打算で動かないということ。

アヤが二階に専務と真鍋が来ているから見にいこうと誘う。「隣の部屋から覗けんのよ」と。おいおい。待合ならいざ知らず、田むらでそんなことできるのか。嫌がる紀子を強引に連れ出すアヤ。二人は階段を上り、二階の廊下を嬉しそうに忍んで歩く。

この時、カメラは二人の全身を映して静かに引いてくる。さらにシークウエンスが変わって間宮家の台所にカメラが寄っていく。

小津は固定という神話があるから、『麦秋』の移動はとても気になる。ここは紀子の行く末を見守る兄・省二の目である。省二が紀子を招き、心配する家族に寄っていくのである。『麦秋』は帰らぬ省二の眼で眺められた世界なのだ。

間宮家の家族会議は周吉・志げ、康一・史子の二組の夫婦。志げは「なんだか可哀想」を繰り返している。ここで注目すべきは紀子の食欲。さらさらと音を立てながら黙然と茶漬けを嚼る紀子。たみのアンパンではないが、食欲と性欲の密やかな、いや露骨な類推がここにある。

## 紀子の嗚咽

海岸を紀子と史子が散歩する。由比ヶ浜あたりであるべきはずだが、ロケは茅ヶ崎の砂山で行われた。『長屋紳士録』（一九四七年）で、おたね（飯田蝶子）と幸平（青木放屁）が歩くあの砂山。紀子たちが茅ヶ崎まで来

たと律儀に取る必要はもちろんない。映画は現実の場所を映して架空の世界を創造するのだから。

紀子が兄嫁にいう。「ほんとはねお姉さん。あたし、四十にもなって、まだひとりですらぶらぶらしているような男の人って、あんまり信用できないの。子どもぐらいある人の方が、かえって信頼できると思うのよ」と。

ここの移動も省二の眼。とはいえ、『麦秋』ではどうも、三宅邦子の豊満な後ろ姿が強調されているように思われてならない。二〇〇四年六月二十一日、茅ヶ崎館の森浩章さんのご紹介で『麦秋』の照明助手・八鍬武さんにお会いし、親しくお話を伺った。その際、小津がお尻を撮るのを恥ずかしがる三宅邦子に八鍬さんが少し横を向きなさいとアドバイスしたものの、すぐに監督に直されてしまったということ聞いた。

運實重彦『映画からの解放 小津安二郎『麦秋』を見る』（一九八八・九、河合文化教育研究所）が指摘する「普通の映画では、ほとんど見えない人間の局部」「お尻」「足の裏」の頻出といい、たしかに『麦秋』の視線はエロティックである。

このあと、紀子はオフィスに佐竹を訪ね別れを告げる。

間宮家では周吉夫婦、康一夫婦、紀子、實、勇が並んで記念の家族写真を撮る。家族写真は二度と帰らぬ、人生の頂上。

すき焼きの宴が終わる。冒頭の「埴生の宿」が再び流れる。紀子が秋田へ嫁ぎ、周吉夫妻が大和に引き揚げることになり、皆での鎌倉「足かけ十六年」（周吉）の生活は終わりを迎える。「足かけ十六年」というから、鎌倉へ居を構えたのは一九三六年ということになるか。紀子が「小学校出た年の春」（志げ）という。康一も結婚していないだろうから實も勇も生まれていない。そして何より、省二という家族がいた。周吉・志げに三人の子ど

もである。ここで子どもたちを一人前にし、また新しい家族ができた。戦争と敗戦、困難な時代だった。

周吉がいう。「いやあ、別れわかれになるけど、またいつか一緒になるさ。いつまでもみんなでこうしていられりゃいいんだけど、そうもいかんしねえ」。紀子に母がいう。「紀ちゃん、身体を大事にね。秋田は寒いんだっていうから」。父が引き取る。「ああ、ほんとに気をつけておくれよ。大事にな。そうすりゃいつか、またみんな会えるさ」。しかし、時の流れは同じ形での再会を許さないのだ。

紀子の目から涙が溢れ、耐えきれずに二階へ上がり長らく嗚咽する。いや、なんとも美しい。

紀子が泣くのは、家族が別れわかれになることを悲しんでいるということだけなのではない。あえていえば、帰らぬ省二が憑依しているのだ。『東京物語』の原節子を私は「日本の運命ウンメイノメウの女」と呼んだ。それとまったく同じことが、『麦秋』の紀子、いやここでは原節子にいえる。原節子は日本の帰らぬ無数の省二に成りかわって嗚咽しているのだ。

### 鎮めの麦の穂

ラスト・シークウェンス。耳成山の全景をうしろに、麦の穂波がゆれる。ひばりの鳴き声。農家の破風が幾重にも重なっている。破風を幾つも重ねるのは山、象徴的には富士山の靈気を自分の家に取り込もうという発想だ。大和に富士の山。「まほろば」である。

「麦畑は『一人息子』（一九三六年）でも使われていた。野々宮良助（日守新一）が母・つね（飯田蝶子）にトーカーを見せる。それが、ヴィリ・フォルスト『未完成交響楽』（一九三三年）で、小津はシューベルト（ハンス・

ヤーライ)がカロリーネ(マルタ・エッゲルト)を麦穂の中で追いかける場面を引用していた。

茂吉が庭を眺め煙管を吹かしている。画面下手の箱には大きな丸に九曜の紋。カメラが切り返すと、周吉・志げが茶を飲んでいる。

周吉が志げの注意を促す。「おい、ちよいと見てごらん。お嫁さんが行くよ」。麦畑を進む嫁入りの行列八人。「どんなところへ片づくんでしょうねえ」と志げ。「うーむ」とやさしく見つめる周吉。「紀子、どうしてるでしょう」と問う妻に、夫は「うーむ。みんな離ればなれになっちゃったけれど、しかしまあ私たちはいい方だよ」と応える。「ええ。いろんなことがあって、長い間」「うーむ。欲をいやあ切りがないが」「ええ、でもほんとうに幸せでしたわ」「うーむ」という応答。

夫は長い息とともに喉を震わせる。妻も遠くを見やり喉を震わせる。

その見つめる先に大和の豊かな麦の秋。伊藤亘二の音楽が悲しく流れ、耳成山と揺れる麦の穂を捉え、カメラがゆっくりと上手に移動していく。

そして溶暗。暗闇の世界へ帰っていく。

「まほろば」の麦穂を辿るのは省二の、そして省二に代表される無数の死者たちの眼である。

この時、『麦秋』は死者たちの悲しみを鎮める真の意味での反戦映画となったのである。

(本稿は平成十七年度日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による研究である。  
本稿を『麦秋』が大好きだった故・宮本裕治さんに捧げます)